

「Textbook of Internal Medicine」

Editor-in-Chief: William N. Kelley

東京大学教授

高 久 史 磨

Lippincott 社から新しく「Textbook of Internal Medicine」という内科の textbook が出版された。大型の判で 2,679 頁、それに索引の頁が 177 に及ぶ内科の本格的な textbook である。

chief editor はミシガン大学内科の chairman と biological chemistry の教授の両方を兼任している William N. Kelley である。彼は NIH におられる時代に Dr. Seegmiller の下で Lesch-Nyhan 症候群の際の hypoxanthine guanine phosphoribosyltransferase 活性の欠損を証明したことで有名で、その後も引き続きプリン代謝の先天性異常に関する研究を行い、また最近では遺伝子治療の問題にも積極的に取り組んでいる高名な科学者であるが、今回新しい textbook の chief editor として膨大な内科の教科書の編集をされたのには驚いた。Dr. Kelley は履歴の示すとおりリウマチを専門とする内科医であるが、ミシガン大学の内科の chairman であるばかりでなく NIH の committee member、学会の会長、専門誌の編集など大学の内外

で極めて多彩な活動をされているうえに、このような大書を編集されたのであるから、そのエネルギーにはただ感嘆するのみである。

私はこの本の書評を頼まれた際、この本が非常に分厚いのと Cecil, Harrison など世界的に知られた伝統のある内科書が既にあるのに、また同じような volume の教科書が出たのかと思って気が進まなかったのであるが、目次を見て従来の内科書と非常に異なっているのに驚き、なるほどこのような内科書の作り方があるのかと感心して書評を書く気になった次第である。

この内科書の内容が他の本と非常に異なっていることは目次の頁を見ただけでも一目瞭然である。例えば、Part II の cardiology を見てみると Section I は “Scientific basis of cardiology” として平滑筋の収縮の問題、動脈硬化の病態生理、心臓の電気生理、心臓の病態生理、など基礎的な問題と重要な病変の病態生理が各専門家によってかなり詳しく述べられている。Section II は “disease of cardiovascular system”

で、ここでは心血管系の疾患の概略が述べられている。概略と言っても重要な疾患については、他の教科書と同様に臨床所見、診断、治療、予後などが詳しく述べられているが、一方あまり頻度の高くない疾患については簡単にその概略が述べられているだけである。次の Section III の “approach to the diagnosis and management of cardiovascular disease” の所が本書の最も特徴的な部分で、syncope, chest pain, heart failure などの訴えのある患者に、どのようなアプローチをしたらよいかについて具体的にわかりやすく書かれている。他の pulmonary disease, gastroenterology などの part もすべて同様に section 分けされており、このような構成によって本書の内容は教師にとっても、また学生にとっても、臨床に直結した興味をもって読むことができるものとなっている。

この本の内容のユニークさは、さすがに Dr. Kelley が新たに編集した本であると、その構成の創意工夫には感心するばかりであった。このような本なら新たに内科書を作る必要があったと思う。新しいスタイルの教科書として本書は長く歴史に残るであろう。

2,679 pp. 800 figs. 1989 年 A 4 判

1-vol. ed. ¥18,050

2-vol. ed. ¥21,850 (いずれも税抜き)

J.B. Lippincott Company,
Philadelphia

日本総代理店 医学書院洋書部